

2020年11月29日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書14章1～7節

説教題：心騒がすな

もう12～13年前になりますが、当時私が通っていた教会の役員会で、顧問の先生が次のような話をされました。「私は今、深刻な問題にぶつかっていて、ここ2～3週間、心配で右往左往していました。しかし、そんな中で、この言葉が示されました」。そう言って「イザヤ書30章15節」の言葉を読まれました。「立ち帰って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る」(イザヤ30:15)。そして言われました。「私が今、為すべきことは、自分の力で何とかしようとして右往左往することではなくて、静まって神様に信頼することでした」。今日の聖書箇所を読んで、あの時の先生のお話を思い出したことでした。

イエス様の告別の説教が続きます。イエス様の目の前で話を聞いている弟子達は、この時、大きな混乱の中にいました。イエス様は「私が行く所に、あなた方はついて来ることが出来ない」と言われます。彼らは、何もかも捨ててイエス様について来ました。ところが「ついて来ることが出来ない」と言われます。ペテロの裏切りの予告もされます。「これからいったい何が起きるのか、いったいどうなるのか」。しかもイエス様の十字架がそこまで迫っていました。彼らを待っている状況の中で、彼らにとって何が一番大切なのか、それをイエス様は「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、また私を信じなさい」(1)と言われたのです。なぜ「心を騒がせないで良いのでしょうか」、ここから3つのことをお話しします。

1：父の家には住まいがたくさんある

2節に「わたしの父の家には住まいがたくさんあります。もしなかったら…あなたがたのために…場所を備えに行くのです」(2)とあります。「父の家」というのは天国のことだと考えて良いでしょう。つまり、恐れなくて良い、むしろ神を信頼しなければならない理由は、彼らにこれから何が起ころうとも、彼らには天国の約束があるということです。私達の回りでも、お元気だった方が旅立って行かれます。しかし私達にも、いつ何があるか分かりません。本当に確かなものはないように思うのです。しかし、そんな中で、天国の約束だけは、あらゆるものを越えて、私達を何が襲おうとも、私達に確かな安心と励ましをくれるのです。

私達にとって「天国の約束」は、当たり前になっているかも知れませんが、それがどんなに価値のあるものか、教えられる話があります。1573年、オランダのロッテルダムで1人のお母さんが処刑されました。彼女は、キリストに従うことを選び取るがゆえに処刑されるのですが、処刑の前に幼い子供達に手紙を書きました。「愛する子ども達へ。主が、あなた方を祝福して下さるように。私は、あなた達から離れて行かなければなりません。私は、あなた達に、金も、銀も、この世の何の宝も残すことは出来ません。でも、何よりも大切なものを残します。それはキリストの戒めです。隣人を愛しなさい。主に喜ばれるように生きなさい。あなた達の人生をキリストの福音の上に立て上げなさい」。彼女には、4人の子供達を残して死んで行かなければならないことに、何とも言えない思いがあったと思います。「母親の務めの方が大事ではないか」という声もあったかも知れませんが、でも、彼女は「本当に天国に繋がる信仰」を全うする

方を選ぶのです。それは、愛する子供達にとって何が一番大切か、そこに目を向けたからではないかと思います。やがて子供達も、母親が命懸けで伝えようとしたもの、「天国の祝福」を自分のものにして行くでしょう。

イエス様の言われた「天国の約束」は、この時点ではまだ、弟子達の現実にはなっていません。だからこの後、身の危険を感じて逃げ出します。しかし、やがて彼らがイエス様に本当の信頼と希望を置いた時、「天国の約束、天国の祝福」は現実となるのです。そして、そうなった時、もう何をどう脅されても、恐れは「天国の約束」にかき消されて行くのです。

2：イエスが迎えに来て下さる

3 節に「行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」(3)とあります。「わたしが行って、場所を用意したら、戻って来る」とは、どういうことでしょうか。1 つには、おそらく再臨のことが言われていると思います。聖書には、イエス様の初臨(クリスマス)以上に再臨のことが預言されています。初臨があったのであれば、再臨も必ずあるのです。やがて、私達の主が、本当の王としてこの地に帰って来られるのです。その時、この混乱し、矛盾と悲惨にあふれた地上が、全く造り変えられるのです。あまりにも美しい光景が広がるのです。その時、私達はイエス様に迎えられます。私達の歴史は、間違いなくそこに向かって進んでいるのです。

しかし、ここで言われている「また来て」は、再臨だけのことを言っておられるのではないようです。それは、やがて弟子達に、そしてそれ以降の信じる者1人1人に、聖霊という形でイエス様が戻って来られる、そのような意味での「また来て」を教えておられると思います。イエス様は、14 節の後の部分で「もう一人の助け主(聖霊)が与えられる」ということを繰り返されます。同時に「わたしは、やって来てその人とともに住む」ということも言われるのです。14 章 18 節にはこうあります。「わたしはあなた方を…孤児にはしません。わたしはあなた方の所に戻ってくるのです」(14:18)。そして神学者は「聖書の教えは、聖霊の助けが前提とされている」と言います。イエス様は弟子達に「心を騒がせなくていい、神を信じなさい、わたしを信じなさい」と言われますが、それは、やがて彼らに聖霊が与えられ、聖霊が彼らを助けて行くという前提があったからだだと思います。だから大事なものは、聖霊に働いて頂くために、主に信頼することです。

「敵をもてなす」という話を良くします。1 人のアメリカ人女性が、仲間と共に南米のある国の村でキリスト教奉仕団として奉仕活動をしていました。彼女達を敵視する兵隊達が、奉仕団と村の人全員を逮捕するように命令を受けてやって来ました。女性は神に「あなたを信頼できますように」と祈った後、兵士達を家の中に招き入れ、隊長に「神があなたを愛しているので、私もあなたを愛します」と言って、イエス様のことを証しするのです。やがて隊長が、彼女を通して、村人を通して「神を知るということは、この世で一番素晴らしいことに違いないと思う…私もいつかは『神を知っている』と言えるようになりたい」とまで言うように変えられるのですが、彼女がこう言っています。「あの隊長を愛することなど、自分だけの力で、できるはずがありません。けれども、そういう人を愛する神の愛が、私の心に与えられたことを感謝

します」。聖霊の働きです。

弟子達のその後の歩みを思う時、私達は、彼らが自分の力で宣教が出来たわけではない、聖霊の助けを受けながら、励まされながら、導かれながら活動して行ったことを疑うことが出来ないのです。そして、私達の中にも、私達がイエス様を信じると決めた時から、聖霊が共に住み、私達の中で働いておられるのです。それは、私達が何かを感じるとか、感じないとか、そういうことではない。信じて行く中で私達の現実となるのです。

3：主イエスを通して神に至る

ここが適用になります。6 節に「わたしが道であり、真理であり、いのちである」(6)とあります。イエスは「私が道だ」と言われます。どこへ行く道なのか。続けて「わたしを通してでなければ、誰ひとり、父のみもとに来ることはありません」(6)と言っておられます。イエス様を通してでなければ、父なる神様の許に行くことは出来ない。しかし、イエス様を通してであれば、私達も、天地を造られ、私達を造られ、私達の人生も、生も死も御手の中に納めておられる神様のところに行くことが出来る、神様と確かに結びついて生きることが出来るのです。だからイエス様は「どんなことがあっても、心配したり、あわてたりしてはいけません」(リビングバイブル 14:1)と言われるのです。その神様は、私達にも「立ち帰って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る」(イザヤ 30:15)と語って下さり、助けて下さるのです。

先日、ハンズマンに行きました。コルクボードを探しましたが、とにかく広くて見つけることが出来ませんでした。店員さんを見つけて「コルクのボードはありますか」と聞いたら、その方は、仕事を置いて、私をボードのあるところまで、結構な距離を案内して下さいました。その方の後をついて行ったら、目的地にたどり着いたのです。その方が私にとって道になって下さったのです。イエス様が道であるということは、イエス様の後をついていったら、神様のところに間違いなくたどり着くということです。

では、イエス様について行くとは、どういうことでしょうか。それは、私達の生活をイエス様の言葉に近づけて行く、あるいはイエス様の言葉の上に生活を立て上げて行く、自分の生涯をかけてイエス様に近づく旅を続けて行くことではないでしょうか。学校に務めて2年目、私は地域の若い教師が集まる研修会に参加しました。私はその研修会のことをいい加減に考えていました。事前に授業実践をして、その結果をレポートにまとめて持って行かなければならなかったのですが、私は簡単なレポートを作って行きました。行ってみたところが、同じグループの12~13人の先生達は、立派なレポートを作って来ているのです。気合が違うのです。私は、自分の考えの甘さに気づかされて一瞬白くなりました。1人ずつ発表が回って来るので「説明の時に立派なことを言って、それでカバーしよう」と考えました。しかし、そんな付け焼刃でどうにもなるものではありませんでした。本当に恥ずかしい思いをしたのを、今でも覚えています。

天国に行った時、神様は私達の何を見られるのでしょうか。天国に着くまで、私達がどのような歩みをしたか、ではないでしょうか。神様を前にして「ちょっと補足説明をさせて下さい」

と言って、取り繕ってみても、どうにもならないと思うのです。確かに私達は、恵みによって、信仰によって救われます。私達の業ではない。でも、私達が本当にイエス様の救い、イエス様の十字架を感謝するなら、恐らくイエス様を信頼し、イエス様に従って行くことを通して感謝を表すのではないのでしょうか。あるユダヤ人の人が、あるクリスチャンに言ったそうです。「なぜキリスト教徒は、自分達のラビ(イエス)から学ばないのだ」。彼に言わせると「クリスチャン達はとてもイエス様から学んでいるようには見えない」らしいです。信仰生活にとって一番大切なのは何でしょうか。恵みを受けることでしょうか。それもとても切実です。でもそれは神様に見て頂くものではないでしょう。私達が見て頂けるのは、どのようにイエス様に信頼し、希望を失わず、祈りを捧げ、イエス様の言葉に歩いたか、ではないかと思わされています。イエス様の御言葉にしっかり歩いて行くなら、私達は、間違いなく神様の許に辿り着くのです。いや、辿り着くというより、今この現実の生活において、神の恵み、祝福に与り、神の御国が既に地上に来ているという、その現実を、神の不思議を味わって行くのではないのでしょうか。

「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、また、わたしを信じなさい」(1)。新しい週、心騒がせるようなことにぶつかるかも知れません。その時こそ、主の言葉に励ましを頂きて、歩んで行きましょう。